ばならぬかも知れぬといふのをあなたが不思議がつて面倒を見てやりなすつた。

秀作　あれからもう十年になるかなあ。あれの右脚の切開をしたのは今でもはつきり覚えてゐる。ちやうど八回の大手術だ。

光子　ですからあなたはたきは気立がやさしい、正直だ正直だといつてらつしやるが、書生部屋の男たちは何だたきの奴、入院するつもりで先生の家にこびりついてるのだなんていつてゐましたよ。

（醫者の家をさがして来て、給金を貰はないから）

秀作　まさかそんな功利的な考から奉公してるつもりではあるまいが……。人間は疑つてかかつた日には限りがないからなあ。

光子　あなたはあんまり人を疑はなさ過ぎるんですよ。たとへばつてあなたが御自分でたきの繃帯までなすつても、何だらの田舎の送つてまた妙な膏薬なんか塗つたりすることがあるんですつて。

（気に食はないと繃帯を捨てゝしまつて）

秀作　しかし人間になつて、こつちの真心を持

とんだ

MARUZEN I